
プロイセン国王 アクセルくん

水乃ヘルギ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

プロイセン国王 アクセルくん

【Nコード】

N0152A

【作者名】

水乃ヘルギ

【あらすじ】

いやもう、何も言いますまい^^・アクセルくんの物語、とだけ
(汗。

序章

前に書いた、ヘルギ先生の続編で、たしか三作目？
もう前の消えちゃったけどw

アクセルくんは、フリードリヒ大王にあこがれて、選定候だった
ご先祖の意志で、王様になりました。
ってことにしといてw
いちいち設定考えるの、嫌いだから（汗）。

アクセルくんは、フルネームをカール＝マリア＝フォン＝アクセル
ル陛下。

宰相のコンラード＝クラヴィエなどは、もうもうもう、あやし
ぎる；

アクセル「おい、コンラード。ヒト暴れしてくるがいいか？

コンラード「どうぞ、陛下。

お好きになさいませ、
どーせ、あなたの国ですから。
私は関与いたしません（笑）。」

アクセル「そつか。なっはっはっは。
って、てめーな！ 何が（笑）だ！
八つ裂きするぞ；」

アクセルくんの性格は、最悪です；
乱暴、わがまま、すぐに銃で撃つ！
十八世紀ですから、銃器類発達しておるのですわ（汗）。

なんか………こっちのほづが書きやすそうw

もう少し付け足すと、アクセルくんは町の娘さんに、

「てめえ、　　するぞー！」

などというもんだから、にらまれております（汗。

通りがかりに言うなよ！

それだけ性格は最悪なヤツです^^；

ていうか、町ひとつ破壊しようなどと言う王様の気持ち、俺にはわかりません；

序章（後書き）

プロイセン国王ってことで、最初の設定はまともにしたかったんですがねー；

どうも暴走経由に走りがちなんでw
俺なんで、まあ許せて感じ（謎w

プロイセン国王 アクセルくん

イヤすぎる王様！

コンラードはアクセルくんの補佐、宰相なのだ。

なのだが、もしかしたら、領主よりもコイツのが最悪かも知れなかつたり（汗）。

「陛下。お昼過ぎにオーストリア皇帝とのお食事会がございます」

「あ、そ」

アクセルくんは拳銃を磨いていて、聞く耳なんか持っちゃいない。

「陛下。陛下！」

「ふうん、それで？」

「……………陛下……………この、クソガキ！ 真面目に聞きやがれ！」

アクセルくんはにやりとほくそ笑みながら、黒い銃口をコンラードに向けた。

「誰に口きいてやがる！ てめー、身体のどこかに風穴ぶち抜かれてえか！？」

コンラードはカツラをなおし、涼しい顔で、

「なあんだ。聞こえているなら返事してくださいよ」

「うるせー。出かけてくるぜ」

アクセルくんは拳銃を二丁、腰につけて出かける用意。

「陛下、陛下がお留守の間はこのコンラードが責任を持って、守ります故」

「ああ、まかせるぜ」

コンラード、ニヤリ。

「しめしめ、陛下がお留守の間は自由時間ですからな」

コンラードさん、さっそくお茶のご用意。

こんなので宰相なんか、つとまるのかよ；

町へ徘徊したアクセルくん。

いーんです、コイツときたら徘徊症なんだからっ。

しかも、アクセルくんは娘さんにむかって、お下品な言葉を連発ばかり。

「あいつ、またきたわよ。いじめちゃいましょう」

顔はいいのに性格が悪いから、もてないかわいそうな人。

イヤすぎるこんな王様（泣；

娘らは一丸となつて、アクセル様に容赦なくバケツをかぶせる！
水をかけられたアクセルくん、顔を真っ赤にしてかまわず娘たちを追いかけ回し、あげくに発砲！

「止まりやがれ！ てめえら、ぜってー、ひとり残らず犯してやる
！」

だからあんた、いやすぎるっつもの；

「うるせー、誰が貴様を王と認めるか！」

と売り言葉に買い言葉……。

はー、やれやれ。

今日も下町は平和ですね（はあと）

と、思いきや。

修道士の格好をしたアヤシイお兄さんが登場。

アクセルくんより目立つブロンドに青い瞳が印象的なこのお方、
むむ？

どこかでお会いしましたか？

「きゃー、ヘルギ様よ！」

はは、どつりで^^；

こいつ、ヘルギじゃねえか！（汗）

「ちつ。なんだあのヤロー。いけすかねえ」

アクセルくんは両手で黒いシリンダー銃を手に、ヘルギ先生に近
づいた。

「てめえ、名をなのね。その前に……俺がだれだか、知っ
てるんだろつな」

ヘルギ先生は余裕綽々と言ったかんじで、

「ほ、知っていますよ。国王陛下。あなたはこのプロシアの王様、
アクセル様でしょう」

「なんだ。わかってるじゃねーか」

と、アクセルくんは言いながら右手を差し出す。

「おや、なんですか？」

「決まってるだろ。通行料さ。俺の許可証がなきゃ入れないぜ。た
っぷりもらっからな」

「がめつい……………」

ヘルギ先生は錬金術を扱う悪魔、ナベリウスを召喚し、たっぷり
の黄金をアクセルくんに渡した。

これに味をしめたアクセルくん。

「よう、ヘルギ。仲良くしようぜ。なっ兄弟」

調子がいいときたら……………。

ヘルギ先生は肩をすくめて舌を出す。

プロイセン国王 アクセルくん

イヤすぎる王様！（後書き）

ヘルギ先生、やっぱりできてくれなきやね
今回は悲劇ヴァージョンやめたいなー；

それでいいんかいつ！

娘さんたちに囲まれた修道士カドフェル、じゃなくてー、ヘルギ先生。

アクセルくんがあまりになれなれしい態度をとるもんだから、娘たちはご機嫌ななめ。

とはいえど、相手は国王陛下。

どんなイジワルでも、王様に変わりはないわけで。

「訴えてやる〜！」

とは、とても言えないわけですね^^；

「へっへっへ、メスブタどもめ。オレ様が誰だか、こついつときこそ、わからせてやれるってもんだぜ」

「くっくっく」

ヘルギ先生はアクセルくんを見てくぐもった笑い。
アクセルくんは怪しんで眉をひそめる。

「あなたは娘ごらの、ほんとうの恐ろしさを知らないのですね」

「は？ なんだそりゃ」

アクセルくんは拳銃を素早くシオルダーから抜いて、

「いざとなりゃー、撃ちまくるから安心しろ」

「そう言う問題じゃねーだろ； まあいい。時が来ればわかる」

木の杖をついて、ヘルギ先生はなおも含み笑い。

「あんな、言い方から態度までそっくりむかつくヤローは、コンラード以来だ」

などとアクセル様は申していますが……。

コンラード・クラヴィエさんは、貴婦人とお茶会をしている間、くしゃみしていたという。

どっちもどっちというか、危険思想をお持ちのふたりですから汗。

「陛下がお戻りにならない場合は、このわたしが領主になります（はあと）」

「まあクラヴィエさまったら。オホホホホ」

おいおいっ；

コンラードさんよお；

「かまいません。王様のことですから、どーせ娘さんたちに嫌がらせをして、どっかで殺られちゃってますっば」

まだ死んでねーよ；

プロイセン国王 アクセルくん

それでいいんかいっ！（後書き）

コンラードまでこんなだし；
何とか言っっちゃってチヨW

愛弟子

ヘルギ先生には弟子がひとりいた。

名前を、ジュリアーノ・ヴィスコンティ。

ヴィスコンティ家と言えば、イタリアの名門貴族。

語らねばなるまい。

……めんどろだが（笑）。

ジュリアーノの過去は複雑で、彼は父親の領主スフォルツァが田舎町のパルマ村に追いやっていた、愛人メリルに産ませた子だった。ところが気まぐれが生じて、スフォルツァはジュリアーノを跡継ぎにと言い出す。

急遽呼び出されたジュリアーノは、母親が病気で死んだことを怒りながら話す。

「お袋を見捨てたくせに、あんたはいつたい、何を考えている」

ジュリアーノは父の死んだあとも、父親のことを認めようとはしなかった。

彼が心を開いたのはヘルギ先生だけ。

ヘルギ先生はジュリアーノが城にやってきた日から見守ってきており、ヴァイオリンを教えたり、フルートを教えたり錬金術まで教えてやった。

「先生はやっぱり、俺の先生だね」

ヘルギ先生は、ジュリアーノの口癖を想い出す。

アクセルくんと呼ばれ、王宮の庭でくつろぐヘルギ先生。

彼はそのことを懐かしんで瞼を閉じていた。

「俺があいつに、モーツァルトやワルツを教えたのも、いまとなっ
ちや夢物語か……」

アクセルくんはヘルギ先生が鬱々としている様子をいぶかった。

「悩んでおいででしょう」

コンラードがアクセルくんの肩をつかむ。

「なにをだ」

「さあ。」自身でお聞き遊ばせ

アクセルくんは舌打ちすると、ヘルギ先生のもとに歩いていった。

「悩みでもあるのか？」

ヘルギ先生は首を横へ振る。

「いいや。悩みではありません」

「じゃあなんだよ。言ってくれ。俺にできることなら……」

ヘルギ先生はその台詞をきいて吹き出した。

「まさか、あんたの口からそんな優しい言葉がでるとは思いも寄ら
なかった」

「なっ、どつという意味だ！」

アクセルくんは恥と怒りとで顔が真っ赤。
ヘルギ先生は笑いがおさまると、

「すまない。しかし陛下。あなたはあいつに、よく似ているから・・・」

「あいつ？ だれ？」

「教えな―い」

アクセルくんはよっぽど、ヘルギ先生を蹴倒そうか悩んだが、やめておいた。

なぜなら、城壁から恐ろしいまでの殺気が渦巻いていたので・・・

「ヘルギ様になんかしたら、承知しない」

といったオーラというか。

いやはや、ヘルギ先生の言った恐ろしいこととは、このことですか；

プロイセン国王 アクセルくん

愛弟子（後書き）

だんだんシリアスになりつつ……。
あるのか、これは^^^；

魔法の鍵

城壁からのぞく無数のオーラ……………。

それは町娘たちの気配（汗）。

アクセル様！

どうかご無事で（号泣！）

冗談はさておき……………。

ヘルギ先生のことになって仕方ないアクセルくん。

噂によると、ヘルギ先生は世界で唯一の『ホムンクルス』を創造したときく。

だが肝心のホムンクルスはどこにもいなかった。

それに弟子の存在もわからない。

「あなたは、ジュリアーノ・ヴィスコンティと言う弟子をとっていったらどう？ そいつはどこにいる？」

ヘルギ先生の顔色が変わったのは、アクセルくんからジュリアーノの名前を聞いたときだった。

「私は弟子など、とっちゃいないよ」

「嘘だ。俺はちゃんと、聞いたぜ。ジュリアーノという人と、もうひとつ、ホムンクルスを創ったって」

「知らない。そんなこと……………でたらめだ！」

ヘルギ先生は足早に廊下を抜けて外へでて行ってしまった。

「ヘルギ……」

アクセルくんはヘルギ先生が落としていった銀色の鍵を拾って、手に取った。

「何だこれは……」

ヘルギ先生はアクセルくんが拾ったことを知らず、懐を探る。しかし鍵が見つからないことに気づく。

「しまった！」

あわてて引き返すが、アクセルくんの姿はどこにもなく、ただ鍵だけが転がっていた……。

「アクセル！」

ヘルギ先生は頭を抱えて、混乱した。
どうするヘルギ先生！

魔法の鍵（後書き）

どうなるんだ、いったい……。。
この間書いた作品と異なるので、ちょっとわくわく。

リユーちゃん

気を失ったアクセルくんは、小川のせせらぎの音で目を覚ました。

「ここはどこだ」

目の前に広がる花畑は非常に広大で、アクセルくんを受け入れてくれているようだった。

「俺、死んで天国まできたのか？ いや、まさか」

「あなたは誰？ なぜここにいるの？」

アクセルくんは声の主と見つめ合った。

風になびく金髪、空色の瞳。

誰かに似ているとアクセルくんは思った。

「お前こそ、なんだよ」

アクセルくんは顔を真っ赤にしていった。

「私、リユー」

少女が答えた。

微笑むと愛らしい。

ますますアクセルくんは舞い上がる。

「あなたは誰？」

再び問われ、アクセルくんはつい、いつもの調子で、

「うるさい。答える義務はない！」

するとリユートの表情がにわかに変化し、世にも恐ろしい顔つきを・
・・・・。

「なんですって〜！ 人が下手にでてれば、このクソガキ！」

リユートはいきなり四の字固め。

エビぞりになったアクセルくんは、鼻水を垂れ流し、涙はふきだ
すわで大騒ぎになった。

「お、思い出した！ てめえ、ヘルギにそっくりだ！」

「あたしはホムンクルスよ、だんな」

リユートの邪悪そうな微笑みが、これから始まる地獄の日々をアク
セルくんに予感させるのだった・・・・・。

プロイセン国王 アクセルくん

リユーちゃん(後書き)

題名だけジャン、かわいいの(爆。
リユーも最初の頃と、相当変わりすぎだっ
て^^^;

ミラノ領主 ジュリアーノ

「バカ野郎！」

リユーに連れられ（半ば拉致られ）て、ヴィスコンティの邸にや
つてきたアクセルくん。

若い男の怒号が聞こえ、眉をひそめる。

「なんだよ、ケンカか？」

「リユーはなあ、おっぱいでかいから、オレは好きになったんだろ
うが！ うへへへ」

アクセルくんは思わず膝を折って落胆した。

「いきなり何なんだ、あの拍子抜けするスケベそーな声の主は；」

「ジュリアーノよ。当代領主」

アクセルくんは頭の中が真っ白になる。

「う……………嘘だろ……………」

「嘘なもんか！ 俺がこの城の主、ジュリアーノだ」

赤毛の健康そうな青年は、いきなりリユーに抱きついて……………
。

「今は昼間でしょ、バカ」

リユーに尻をつねられる。

「いででで！ 夜まで待てない！ ねえ、お願いリユーちゃん」

「だめよ」

アクセルくんは思わず舌を嚙んだ。

「あ、あ、あのよお、お取り込み中悪いんだけど；」

「そーいえばきみは、いつたいなんだねえ。我々の恋路を邪魔しようと言うのか！」

「あほか、そうじゃねえよ！ てめー、頭のねじ抜けてるだろ；」

「なんだ、そうなの？ はっはっは、そりゃ悪かったなー。最近薄汚いヤツらがリユーを狙っていてねえ。まあ、そのへんで座つてくれ」

アクセルくんは頭をかいてイスに腰掛ける。

「薄汚いヤツつて？」

「リユーはホムンクルスだから、実験体にしようとしている団体がしよっちゅう……。ね。俺の悪魔召喚じゃあ、たかが知れてるし……」

「悪魔召喚？」

「アクセルくんは眉をひそめた。」

「そついや、ヘルギも使っていたが」

「なぬ！？ ヘルギ先生を知っているのか」

女官が運んできた紅茶キノコをこぼし、ジュリアーノは立ち上がった。

「きみい、きみい！ 先生がどこにいたのか、教えてくれよお」

「ぶ、プロイセンだよ、俺の国……」

ジュリアーノはつかんでいたアクセルくんの襟首をぱつと離れた。

「そいつはやばいな。何せ今、プロイセンとは戦争中だ」

「何時代だよ！」

「今？ ええと、十六世紀だが……」

「………あん！？」

アクセルくんは汗をかいた。

「ちょっとまってくれ。俺は十八世紀の人間………だぞ！？」

「はて」

ジュリアーノはリユーと顔を見合わせた。

「するときみは、先の時代からきた、というのかね」

「十六世紀が現実ならな……」

「うーん」

ジュリアーノは髪の毛をぐしゃぐしゃとかいて、

「まあいいか。俺、考えるの面倒だし」

と喋って舌を出した。

「それであんた、よくまあ悪魔なんぞ……」

アクセルくんも考えるのは苦手だったので、言うのはよした（汗）

「ヘルギ先生はだいがまえに行方不明になってね。捜していたんだが、いつころに見つからない。もし会えたらリユーのことを護る方陣でもないかなー、と思ってねえ」

「なるほど」

ヘルギのヤツ、さっさとこっちにくればいいのに。

アクセルくんは思ったが、まだ鍵が原因で過去にやってきたことになど、いつころに気づかなかった。

とろいんだよなー、コイツら（笑）

ミラノ領主 ジュリアーノ（後書き）

まったくイヤすぎる領主揃いか、この物語は^^；
イタリア対プロイセンとは・・・・。。
ぜひみたい（笑）。

プロイセン国王 アクセルくん

消えた王様

「あいつは、永遠を望むことはなかった」

ヘルギ先生はコンラード相手にお茶をすすする。

「あいつ、と言いますと」

「ジュリアーノ・ヴィスコンティ。一番の愛弟子だった男でね」

「さようですか」

コンラードはうなずいた。

「永遠を望むものは、かなり多いと聞きますがね」

「だから、錬金術師の活躍の場が広まるんじゃないか」

ヘルギ先生は苦笑した。

「賢者の石、別名をざくろ石。そして石を創る際にできる、エリクシル。エリキサとも言う。その液体を飲めば、不老不死の肉体を得ると言うが、ありえないね。使う物質はほとんど人体に有害な水銀や砒素、さらに亜鉛を使うことだって」

「それは恐ろしい」

「したがって、賢者の石は『神の石』つまり、神に選ばれたものしか手にすることがないのだ」

コンラードは、カツラをかぶりなおす。

「神に選ばれた」

「まあ、俗世間で言うところの、噂ってヤツ」

「まるで神話ですね」

ヘルギ先生は苦笑した。

コンラードは何もわかっていないと。

「神話じゃなく、現実に行き起きていることだから」

「は、はあ」

コンラードは咳払い。

「さて、それではアクセル様がどこに行かれたのか、考えてくださ
い」

「いなければ困るか？ コンラード殿……」

ヘルギ先生は試すような口調でものを言う。

コンラードは少々、冷や汗をかきながら、

「あ、いえ、もし戻られることがなければいいまま……」

「それもよからう」

ヘルギ先生、ずるずると紅茶をすすった。

「いえ、ご冗談。やはり、この場にいってもらわねば……その……」

「その通り、冗談だよ」

コンラードはイスから転げ落ちそうになる。

「ヘルギさん」

「からかって悪かった。だがたまには、いいだろ？」

コンラードの視線は、何いってんだか、と言っているかのよう。

「そう怒るなよ！ だいじょうぶ、行き先はわかっているから」

ヘルギ先生はにやりと含み笑いした。

プロイセン国王 アクセルくん

消えた王様（後書き）

いなきや 困るでしようが、そりゃ〜：
コンラード、頼むぜw

召喚術

「ホムンクルスは世界で唯一と聞いたが」

アクセルはジュリアーノに尋ねていた。

ここは砦の頂上。

見張りとしてアクセルも駆り出され、鎧（プレストアーマーに近い）を身につけている。

「ああ、そうだよ」

ジュリアーノは一国の主と想えないほど、慈愛に満ちた表情で語りかける。

アクセルもそこは見習いたいと思うのだが、リユアの顔を見るとすぐ歪むところだけは遠慮したかった。

「リユアのどこがいいんだ、お前」

アクセルはわざとすねた言葉でつぶやいた。

「全部」

アクセルはジュリアーノのえげつない笑顔に、ため息をもらした。

「一生やってる……でもわからんね。あいつは人造生命体で、人間じゃない」

「バカな」

ジュリアーノはさつきと、うってかわって、凜々しい、厳しい表情になる。

「俺はリユーが人間だっことを認めているんだ。それはヘルギ先生が産んでくれたから、大切に育ててくれた命だから。俺も愛しい」

「ばっ、恥ずかしくねーのか、そんな台詞……」

オレも書いててはさつきです（汗）

「ていうかあ、リユーは美人だろお、ぬへへへ」

お前はそれがなきや、立派だと思っよ……

アクセルくんの心の叫びだった。汗。

ところでヘルギ先生はどうしているのか。

例の鍵で過去へ行こうと試みたが、失敗だったようだ……

「おかしい、クロノスの力が弱まっているのか!？」

クロノス 時間を司る神様。

ヘルギ先生たち錬金術師や魔術師は、神々の叡智と力をいただいて、隠された能力を発揮する。

いわゆるヘルメス学の一部になるが、魔法陣や魔法円、ペンタグラムを描き、悪魔や天使を召喚する。

そして術を教わったり、この世の真理を教わるのだ。

悪魔によっては、肉体をもらうために契約させるものもあるよう

だが、たいていはパンとワインで契約をすます。

ヘルギ先生もパンと赤ワインで悪魔との契約を行い、どうにかク
ロノスの力を引き出そうとしていた。

「何度試してもダメか。おのれえ……………」

脂汗が彼の額を流れる。

「ジュリアーノ……………リユー……………」

懐かしいものたちの笑顔が、瞼に浮かんでは消える。

鍵に涙がこぼれ落ちた。

するとまばゆい輝きに包まれ、次の瞬間、ヘルギ先生は見慣れた
景色に声を上げた。

「おお、戻れたのか、あの頃に！」

ヘルギ先生は感動し、想わず大声で泣き叫ぶ。

召喚術（後書き）

苦労した分、ヘルギ先生は
うれしかろうw
というかジュリアーノ！
お前はスケベすぎw

プロイセン国王 アクセルくん

邪心を抱くもの

「ところで」

アクセルくんがジュリアーノに尋ねた。

例によって皆の上。

強めの風が吹き、アクセルくんとジュリアーノの髪をなびかせる。

「リユーを狙う一味って、どんなのだ？」

「ハンス・アグリツパ。昔いたアグリツパという魔術師の後継者だよ」

「アグリツパ？」

アクセルくんはもう少し、まじめに中世スコラを学んでおけばよかったと後悔。

「俺もさあ、もーちよい真面目に哲学だの、錬金術だのを学んでおけばよかったなーと後悔してるんだー。先生に教わりたかった……」

あ、同じだ。

アクセルくんは鼻でふふっと笑ってしまった。

「なに、おかしいかい？」

ジュリアーノはゆっくりアクセルくんを振り返る。

「俺と一緒にだなあと想って」

「ふうん」

ジュリアーノは視線を戻し、瞬時に剣を抜いた。

「あつ！ アグリツパ」

ジュリアーノは真つ青な、カール・マルテルがお気に入りだった、毛皮のマントに似せたものをひるがえし、階段をもつごい勢いで駆け下りると、リユーを呼びつけた。

「リユー！ どこだ、隠れたのか」

「ジュリアーノ！」

薄暗い、ろうそくの明かりだけがともされた廊下。その向こう側から駆けてきたリユーは、ジュリアーノの胸に飛び込む。

ろうそくの、そのきらめきは、お互いの恋心を表すかのように輝いていて、彼らが抱き合っているところへ、壁が崩壊し、眼鏡の男が現れた。

ジュリアーノは左手に剣を持ち、男とにらみ合った。

「アグリツパ、きさま！」

アクセルくんは男の存在に気づくと、拳銃の弾を入れ替え、ジュリアーノの陰に隠れ、撃つ機会を窺う。

プロイセン国王 アクセルくん

邪心を抱くもの（後書き）

アグリツパねえ^^；
こいつ、すごいアホですから 爆
シリアスもここまでかなー 汗

アスモデウス

「ジュリアーノ。そしてリユー。．．．．ふん、ホムンクルスの分際で、人間に媚びすがろうなどは」

眼鏡を押し上げて、アグリッパがつばを吐いた。

「リユーをそんな風に、呼ぶな！」

真っ青な刀身をしたジュリアーノの剣は、アクセルくんが知る限りでは、並大抵の代物ではない。

きつと錬金術で加工したんだろう、と思った。

「リユーはそんな、ちやちな生き物じゃない！」

「ほう、ではどういふのだ。ホムンクルスは所詮、人間の道具にすぎない」

赤いルビーがはめ込まれた杖をふりかざし、アグリッパは鼻を鳴らした。

「わたしが最強の悪魔を召喚し、ジュリアーノ、きさまをつぶす。

そして．．．．リユーをいただいて、実験体にするのだ」

「させねえよ！」

アクセルくんが素早く発砲した。

アグリッパの腕を貫通した銀の弾は、彼のもつ杖をウマイ具合に落下させる。

「リユーはたしかに人間だぜ、ジュリアーノ！」

ジュリアーノは、想わずその言葉に、

「ありがとう」

と返した。

「貴様、なぜその弾を……」

アグリツパは腕から流れる鮮血を見て青ざめ、アクセルのほうに顔を上げ、牙をむいた。

「ちくしょう！ 油断した……。まさか選定候の隠しアイテムを持つものがいたとはな！」

「なに、選定候？」

ジュリアーノはアクセルを振り返る。

「アクセル、おまえ！」

「だったら、何だ？ くそ魔術師！ もう一発、くらいてえらしいなあ、遠慮しないでいいぜ」

アクセルは照準を再び合わせると、アグリツパめがけて撃った。

「ははは、二度は喰らわぬ！」

漆黒の外套をバリケードにし、弾をよけるアグリツパ。

「ちっ」

アクセルくんは腰からサーベルを抜いて、斬りつけた。

「あ!?!」

ところが、ちぎれたのは外套だけで、アグリツパは姿を消していた。

「ははは。どうした」

アグリツパがアクセルの後頭部を杖でしこたま殴りつける。

「てめえ!」

頭を押さえ、アクセルは闇雲に発砲した。

「目で見るとじゃなく、気配で倒せ」

「お、なるほど!」

アクセルはジュリアーノの助言に従い、目を閉じて気配だけでアグリツパを追った。

「目で見なければ、何もつかめまい」

ところが今度はヒットし、アグリツパの左腕を貫通!

「貴様、よくも……」

両腕から滴る、鮮血。

アグリツパはそれを見て、青ざめた。

「アクセルとかいうたな、貴様、殺す！ アスモデウスを呼ぶぞ？」

ジュリアーノは顔面蒼白になっていた。

そのアスモデウスは、悪魔の中でも最強最悪の性質を持つものだったからだ。

銀の弾。

ジュリアーノはアクセルのもつそれを、じつと凝視した。

選定候ファルツの子孫でもあるアクセル。

アクセルのもつ銀弾は、魔術師、特に邪心を抱くものに対し、力を増幅させるという。

「俺の先祖は、何とありがたいものを残してくれたことか」

アクセルは拳銃を改良し、単発式を連射式に変え、おかげでアグ

リツパは憔悴しきっていた。

「たちの悪い！ 連射銃か」

「うるっせーっ、黙ってコイツの餌食になりな！」

「お、おのれ」

アグリツパは印字を結んでアクセルの陰を縛った。身動きのとれぬ身体に、アクセルは歯ぎしりする。

「て、てめー、何しやがった！」

「はっはっはっは。貴様の陰を縛り、動きを封じた」

アグリッパはジュリアーノに向き直り、呪文を詠唱した。

『我招く、その力は強大で、世界を二手に分かつだろう。召喚、ア
スモデウス！』

ジュリアーノはリユーを背中にかばいながら、アグリッパの召喚
に脂汗を流した。

「せ、先生、どうしよう…」

ジュリアーノは自分が悪魔を呼べることすら忘れて、ただただ苦
悩し、立ちつくすのであった（汗）。

アスモデウス（後書き）

まあ、こんなもんでしょう。

前回の内容とホント違うねえ。

ユーリでてこないし（汗）。

ていうかアグリツパはいつ壊れるんやろ；

ヤツパ最強

「ヘルギ先生……」

ピンチに立たされたジュリアーノを励ましたのは、ほかでもないリユーであった。

「ジュリアーノ。あんたも悪魔呼んだら？」

「あ」

ジュリアーノはへらへらと笑い、地面にペンタグラムを描いた。

「そうでした、そうでした。えへへ、いけね」

「しっかりしてよ」

「まったく、バカなんだから……」

アクセルもこっさりつぶやいた。

「ホントにおめえ、ヘルギの弟子なのか？」

「うっせえ； ガキは黙ってろっ！」

ジュリアーノは短めのワンド（錫杖タイプ・プライスレス）を手にすると、

ゆっくり『レメゲトン』とか、『ゲーティア』と呼ばれる、魔術書の呪文を唱え始めた。

『わが神、テトラグラマトン。我が声に従い、かのものを召喚せよ。
ナベリウス！』

ジュリアーノが左手の指にはめている黄金の金印。

召喚するもの、世界を統治するものしか手にできない代物である。それは古代王、ソロモンが手にし、悪魔だけでなく動物や精霊さえも支配できる魔法の指環だった。

アグリッパはこの印章を手に入れ、リユーを『キメラ』と呼ばれる魔獣に変えてしまう実験を行おうとする、悪質な魔術師だった。

アグリッパにとっての天敵は、ヘルギである。

今敵対する人物は行方不明のヘルギではなく、ジュリアーノで、アグリッパはジュリアーノの実力を把握していた。

そのため、余裕の笑みを浮かべて、ナベリウスの出現を待つ。

ナベリウスは銀色の髪をした老人の姿で、ジュリアーノの描いた魔法円から飛び出した。

「ナベリウスね」

アグリッパはアスモデウスを顎で支配した。

アスモデウスの邪悪な姿、鳥のような巨体、頭には鶏冠、気味の悪い一つ目が印象的だった。

「そうそう。教えておいてやるよ」

アグリッパがジュリアーノに言った。

「ヘルギを消し去ったのは……このわたしだ」

「なぬっ」

アクセルは驚いて悲鳴を上げたが、ジュリアーノはワンドを抱えたままで、

「あつそ。別に驚きやしねーよ」

と言いながらナベリウスに命じた。

「いけ、ナベリウス！ アスモデウスなんかには負けるな！」

「こしゃくな」

けれど、力の差は歴然とし、ジュリアーノは押され気味のナベリウスに声をかけた。

「何やってるんだよ、押されてるじゃないか」

「だってだってえ〜ん、ご主人！ コイツ強いよお」

なっ、なんか、だせえな；

アクセルは汗をかきながら事態を見守る。

「リユー、ナベリウスって悪魔らしくねーぞ」

「しかたないじゃん、主人がああだし……」

アクセルは笑うことすらできず、身動きのとれない我が身を呪っ

た。

「くっそー、この身体さえ動けばなあ」

「解除！」

声が響いて、アクセルは勢い余り転がった。

「あ、ヘルギ！」

リユーが悲鳴を上げた。

「どこにいたのよ」

「ちょっとバカンス」

冗談めいて言うヘルギに、アクセルはつかみかかり、こういった。

「何がバカンスだ、このやるゝ！ 人があの、ばか魔術師にやられそうだって時に」

「何を言う！ もとはと言えば、お前がこのクロノスの鍵を持っていつてしまったからだろう」

アクセルはヘルギの襟首を離した。

「あ、そか」

「それより、苦戦しているようだなあ、ジュリアーノ。手伝ってやるるか」

ジュリアーノには返答する余裕がなく、右往左往するばかり。

「ナベリウスがやられちゃうよ、どーすりゃええんだ!」

「イヤだから、落ちつけての。」

ジュリアーノの頭を殴って、自分の存在に気づかせるヘルギ。

「あ、まじっすか。先生!」

「ぬあ!?! ヘルギ!?!」

アグリツパは顎をはずす勢いであんぐり口を開いた。

「アグリツパ……………」

ヘルギは手をぼきぼき鳴らし、ナベリウスに増強剤を渡すと、

「殺つちまえ(はあと)」

と命じた。

「ぎひいいい」

あっけねえ……………。

ナベリウスの稲妻攻撃をイヤと言うほど浴びたアグリツパを見て、アクセルは引きつった笑みを浮かべる。

プロイセン国王 アクセルくん

ヤツパ最強（後書き）

ヘルギがでてくると最強すぎて、あっけねえ
不老不死の英雄だから仕方ないか（汗）
w

小悪魔ちゃん

「とりあえずアグリッパは懲らしめて、地下牢につないだが……」

ヘルギ先生は、こつた両肩をたたきながら、ジュリアーノとリューを見やって、

「こいつらをどうにかしてくれ。」

とアクセルに言った。

「俺にどうしろというんだ」

ラブラブなふたりの間には、何人たりとも入ることができない汗。

「リューちゃん、子供は何人ほすい？」

「ふたりでいいわ。」

「えっつ、もうちょっと妥協しようよお。せめて……五人でどうぞだ」

「ちつとは、リューをいたわれつ。俺の娘だぞ……畜生！」

ヘルギ先生、ブチキレ寸前！

「先生からも説得してよお。リユーのヤツ、ちっとも俺の願いを聞いてくれないんだ」

「おめーが浮気ばかり、するからだろ」

ヘルギ先生のどぎついつっこみに、ジュリアーノはあわてて口を塞ぐ。

「わっばか、先生！ そのことは……」

「ジュリアーノ……」

ジュリアーノはゆっくりリユーを振り返る。

その表情は恐怖に打ち震えていた……。

「浮気って、いったい何のこと？ ヘルギ！」

「いや、それは、まあ、その」

「先生、フォローしてくれって」

「弁解の余地、なし！」

リユーのジャイアントスイングが炸裂し、ジュリアーノ、ノックダウン！

「浮気は許さないって、あたし、いったはずよねえ、あ・な・た」

「ももも、もうしましえん……がくっ」

恐ろしい女だ………。

アクセルは二度とこちらの世界に関わりたくない、そう願っていたが。

ヘルギ先生の魔法で、もとの時代に戻ったアクセルくん。
かの事件から三カ月が経とうとしていた。

「ジュリアーノたち、元気かなあ」

と懐かしむのもつかの間。

コンラードがかわいらしい娘を連れて、アクセルのもとにやってきた。

「なんだい、コンラード。その子は」

「はい。なんでもジュリアーノ様のお子と申しておりますが」

アクセルくんは引きつった笑みを見せる。

「ユーリと言います。『ユール・クラブ』が語源なんですって。
アクセル様のこと、お母様やお父様からよおおおく、お聞きしまし
たわ。これからよろしくと、父が」

「うわあああ、悪夢だ！ これは悪夢だあ……」

アクセルくんは急いで外へとかけだした。

「陛下、お逃げになるのですか。許しませんよ」

コンラードの目が輝き、しかけておいたピアノ線でアクセルを引っかける。

「コンラード、てめー！」

「リュウさんから頼まれていますゆえ。いろいろとね（はあと）」

コンラードとユーリは、顔を見合わせて邪悪そうに微笑んだ。

アクセルくんの、ちきしょーという悲痛な叫びが、今日もプロイセンの町を響き渡る。

あゝ。今日も平和だねえ。（違：）

f i n

小悪魔ちゃん（後書き）

足りない部分が多かったかな^^；

前に書いた内容も、そうとうおおざっぱだったので、もっとわかり

やすい内容に、とつとめた結果ですが・・・。。汗

まあ、アグリッパの野望はうち砕かれたってことで（笑）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0152a/>

プロイセン国王 アクセルくん

2008年11月7日06時32分発行